

2017年度 タイ王国マハナコン工科大学獣医学部

研修報告書（第2回：8/17-8/31）



北里大学獣医学部 獣医学科

2017年度 タイ王国マハンコン工科大学獣医学部 夏季研修の概要

獣医薬理学研究室 山脇英之

昨年からスタートして本年が 2 回目となるタイ王国マハンコン工科大学(MUT)獣医学部 (バンコク市) 夏季研修に同行教員として 8 月 17 日から 31 日の間、参加しました。本研修は本学と MUT の協定に基づく交換プログラムで MUT からは数年前より 6-7 月に研修生が本学を訪れ実習・研修を行なっています。本学からタイを訪問し学生が研修を受けるのは今年で 2 回目となります。2016 年 11 月 25 日に 2016 年度 第 1 回目となる同研修の報告会を実施後 (5 名の研修生: 当時 5V)、本年度の研修生募集 (最大 5 名以内) の説明会を行いました。この際、注意事項として米国夏季研修との掛け持ち志望は禁止であることを伝えました。参加希望者には志望動機と TOEIC スコア (必須) を記入してもらうためにアンケートを配布し、11 月 30 日にこれを元にアジア国際交流実務委員会のメンバーによる面接を実施し、2 名の研修生 (当時 4V) を決定しました。その後、2017 年 1 月 19 日に第 1 回目の狂犬病ワクチンの接種を十和田東病院で開始し、2 月 16 日 (2 回目)、7 月 13 日 (3 回目) と計 3 回行いました。前期定期試験、追・再試験、VetOSCE (8 月 8 日実施) の日程を考慮し、2 週間の研修日 (8/17-31) を決定し、MUT 側の都合も確認して 3 月 1 日に航空券を予約・購入しました。MUT 獣医学部の担当窓口は Dr. Sitthichon Rattanachan (James) 先生で 2 月上旬から研修日程や滞在先アパート、研修内容・スケジュール、その他の件でメールによるやりとりを開始しました。同時に私達の獣医薬理学研究室の OB (平成 25 年 3 月博士課程修了) の Dr. Sukanya Phalitakul (Happy) 先生とも上記に加えて、週末の観光予定に関してメールでのやり取りを開始しました。そして 3 月半ばには滞在先のアパートが決定し、5 月中には研修内容・スケジュールの概要がほぼ決まっていました。また 5 月中に本学・教務課に研修生の研修参加申込書及び父兄の同意書を提出すると共に、MUT に推薦状と Students documents の送付を行い、受け入れを正式に認めて頂きました。こちらでは 6 月の教授会で本研修が承認されました。また出発前までに海外旅行傷害保険に加入すると共に外務省のたびレジ (<http://www.anzen.mofa.go.jp/>) に登録しました。なお、6 月 5 日から 7 月 5 日の 1 ヶ月間、Happy 先生が 2 名の女子学生 (8 月から 5 年生) と共に本学獣医学部を訪れ、大動物臨床、小動物臨床、そしてラボ (薬理学研究室) で実習・研修を行いました。またこの間、2 名の本学研修生とも、ティーパーティーやフェアウェルパーティーで交流を深めました。MUT の 2 名の学生には我々の滞在中、大変お世話になりました。研修スケジュールの概要は以下の通りになります。

研修スケジュールの概要

Date	Student's schedule	Staff
Thur 17th	Pick up at Suvarnabhumi airport	Dr. Sukanya
Fri 18th	Morning - Visiting MUT animal diagnostic center Lunch : Welcome party	Dr. Krisada Dr. James
Sat 19th	Sightseeing-Ayutthaya & elephant camp	Dr. Sakchai & Dr. Sukanya
Sun 20th	Free time	
Mon 21st	Large animal teaching hospital-MUT	Dr. Thanakorn & staff
Tue 22nd	Khao Keaw Open Zoo	Dr. Natthawut
Wed 23rd Thur 24th	Practice exotic animal at Premier small animal hospital	Dr. Natthawut
Fri 25th	Large animal teaching hospital-MUT	Dr. Thanakorn and staff
Sat 26th	Pick up-University for sightseeing in famous places Send back to university in evening (university's van)	Dr. Sukanya
Sun 27th	Shopping at Siam square, etc. Send back to university in evening	Dr. Sukanya
Mon 28th Tue 29th	Practice at small animal hospital	Dr. Titaree & staff
Wed 30th	Student's presentation and meet Dean (certificate ceremony) Farwell party (Lunch)	Dean-Dr. Jatuporn
Thur 31st	Pick up at apartment and Departure from Suvarnabhumi airport	Dr. Sukanya & Dr. James

研修学生（5V）

坂之上 彩（実験動物学）、松永 萌（人獣共通感染症学）

研修にかかった費用（学生）の概要は、航空運賃（羽田-バンコク間）¥63300、アパート代 約¥14000 と狂犬病ワクチンの接種料金¥45000 となります。

研修先の MUT はバンコク市街地からは車で約 1 時間、スワンナプーム国際空港からは 40 分ほどの場所に位置し、大学を中心とした学生街で活気にあふれた場所でした。アパートは MUT 獣医学部から徒歩で 20 分ほどの場所に位置し、周りにはやはり学生用のアパートが多くありました。スーパー、コンビニ、飲食店は徒歩で行ける場所にいくつかあり、日々の生活に不自由はありませんでした。気候は 4-5 月が最も暑い時期で 8 月は雨季でもあったため、正午近くを除いては思ったほど高温または多湿ではありませんでした。運良く天候にも恵まれ、スコールも数回遭遇したほどでした。特にアパートの中は涼しく夜はエアコンなしでも過ごせるほどでした。滞在中の平日は大学で過ごし、週末は大学の送迎用バンでアユタヤ遺跡やマーケット、バンコク市街地にある寺院や宮殿などを案内して頂きました。期間を通して研修が順調に進み、何不自由なく快適に過ごすことができたのは James 先生、Happy 先生をはじめとする MUT スタッフ[エキゾチックアニマルの Natthawut (Golf)先生、小動物臨床のティタリー先生（本学獣医生理 OB）、サクチャイ先生（本学人獣共通感染症学 OB）、パサディン先生（本学獣病理 OB）他]の心遣いの賜物であり、この場を借りて御礼を申し上げたいと存じます。

最後に、今後も本学と MUT の国際交流が継続し、友好的な関係を築いていけるよう微力ながら尽力したいと思います（2017 年 10 月）。



タイの研修を終えて

実験動物学研究室 5V 13054 坂之上彩

8月17日から31日までタイのマハナコン工科大学で小動物、大動物、エキゾチックアニマルの研修を受けてきました。小動物では猫と犬の診療を見学させていただきました。病院にくる猫の中には、飼い猫が外に出たときに野良犬と喧嘩をして猫がけがを負う症例(写真左)があり、なかなか日本では見られないと思いました。右の写真は病院で飼われている引退した供血犬です。カラーをつけているのは拾い食いを防止するためだそうです。



この猫の処置は日本で習った手順と同じく、開放創である程度肉芽が再生されてから外科的に手術を行い閉創するという流れでした。今回は肉芽の再生過程を見学させていただきました。噛まれた部分の傷が深くとても痛そうでした。犬は独特の噛み方をするため治療の時間もかかるようで飼い主さんも毎日病院に連れていく必要があったため大変そうでした。また、神経症状の疑いのある犬が検査を受けに来ており、神経の検査の講義は終わっていたので実際に目で見る事ができて良かったです。タイの病院では主に6年生が保定を行ったり飼い主から主訴を聞いてカルテに書いたり学生が主体的に診察をしていました。レントゲンの撮影が終わった時やエコー検査をした後には先生が生徒に向けて症例の説明をして、分からなければその場でみんなと一緒に考え診断を下していくという方法で取り組んでいたためとても勉強になりました。私も画像診断やエコー検査の授業は受けていましたが、授業ではここまで友達と議論したことがなかったので面白かったです。今回見た症例は特徴的なものでしたが、日本語で思いついてもなかなか英語で返すことができず苦労しました。英語力の無さを改めて感じました。

エキゾチックアニマルは大学病院ではなく近くの病院に見学に行きました。主にウ

サギ、トリが多かったです。タイでも病院にくる原因の多くは日本と同様飼い主の知識不足だったように感じました。



マーマセツトに日光浴をさせずビタミン不足になったり(写真左)、ハリネズミに人間の食べ物を与えていたために栄養不足になり病院に来ていることが多かったです。このような環境下で飼われていた動物たちは病院で入院をして適正な状態にしても動物は日光浴を嫌いケージの隅にうずくまっていたり食事をしなかったりと、先生も学生もとても苦勞をしていました。学生が実習できて入院動物のお世話や診察の手伝いをしておりエキゾチックの扱いにも慣れているようでした。特にその動物の名称や生態に関する知識はどの学生も知っていて話を聞いているだけでもとても勉強になりました。そのほかに鳥に対して内視鏡を使い雌雄の判別をしていることには驚きでした(写真右)。日本で実習をしたときにはなかったことでありまたその鳥も見ただけでもない鳥でした。プレーリードックなどもタイではペットとして飼われているようで、今回行った病院には入院していたので実際にみる事ができてよかったです。タイの病院でも日本の病院と同様に、ワクチンの接種を促すポスターは見ましたがなかなか飼い主さんに徹底できず苦勞をしているようでした。どこの国でも課題は一緒だなと思いました。

大動物ではフィールドワークが1日あり外に出て馬の診療を見学してきました。タイでは大動物といえば馬のことで1つの農家で20頭ぐらいで、その多くは繁殖用に飼われていました。今回の往診では子宮洗浄の処置を行ったり、点眼をしたりエコーで妊娠診断をしたりと牛と同様の処置を行ったりしましたが、牛よりも馬は大きく迫力があつたため直腸検査で後ろに立つだけでも怖かったです。また妊娠している馬は

気性が荒くなっているため蹴り上げてくることもあり、エコーで確認しているときは馬の脚に気を付けながら画面を確認するという状況でとても緊張感がありました。残りの1日は大学で飼っている馬のエコー検査や点眼、採尿の見学でした。目薬をさされる馬は何回もされているためか柵場に連れていかれると分かった時点で歩くことをやめたりするので人間と馬との知恵比べになっていました。点眼をするときも馬が暴れたり目を開けなかったりなどの抵抗をするため学生だけで行うにはとても大変でした。

タイで実際に臨床の現場にいき感じたことは、手技や手術方法などは似たように思いましたが、衛生面では違いを感じました。日本では手術室では靴を履き替え、手術前の無菌操作や服装には非常に気を使っていたように思います。タイではサージを着たりすることもなく、手袋とマスクを着用した恰好で手術をしておりリラックスした雰囲気で行われていました。また先生と生徒の距離も近かったように感じました。小動物では学生が診察の時に患者さんに直接動物の状態を聞くことはないですが、タイでは学生が直接聞くことも触ることもできておりここでも違いを感じました。タイの馬はフリーストールで1頭ずつ飼われていたため自由に過ごしているように感じました。タイは暑いので馬舎に風を送るように工夫もされていました。往診の時は、生徒が器具などの準備をするだけでなくカルテをかいたりエコー検査をしたりと実際に経験することができるので経験を積むことができるように感じました。タイでも日本と同様大動物の農家さんは生徒が動物に触ることに対しておおらかでした。タイの農家さんの方がもっとおおらかでした。実習をして感じたことはタイの学生はとても親切で、実習に急に参加をしても丁寧に教えてもらいとてもよくしてもらいました。また会話をしているときも日本のことをよく知っていたり、日本に旅行にきていたり、親族が日本で働いていたりとかかわりがある人が多かったです。

カオキオ動物園では展示の方法が日本の動物園とは違っていました。



サルの展示では檻や囲いがなく自由に動き回っていて楽しそうに見えました。シカも囲いの中ではなく自由に行動ができ、時にはえさをもらっていたりとのびのびとしているように見えました。また、サファリパークの展示方法も日本とは違い多くの種

類の動物と一緒に広いところで飼われており、よりいっそう迫力がありました。動物たちとの距離も近く触れ合うことができ楽しかったです。

アユタヤでは象に乗ったり寺院をまわったりしました。象の乗り心地は思っていたよりも揺れるため乗っている間は少し不安もありましたがとても楽しかったです。象が賢く、途中自分で水浴びにいたり自由に動いていました。

タイの寺院や王宮は迫力がありまた黄金色で豪華絢爛で私が想像していたアジアの建物の風景でした。特に王宮はとても大きく、見どころが多くとても楽しかったです。

タイの寺院にあるおみくじの引き方も独特で文化の違いを感じました。

あまり食べたことのなかったタイ料理ですが、スパイシーでおいしくまたココナッツミルクがきいていたりして私たちでも食べることができる料理がたくさんありました。飲み物は甘く冷えているため暑いタイではとてもおいしかったです。また、種類も多く飽きることなく飲むことができました。

今回タイに行った経験をこれから先、活かしていきたいと思います。タイにいき感じたことはとても親切で先生や学生がたによくしてもらいました。ハッピー先生をはじめマハナコン大学の先生、学生の皆さん 2 週間と短い時間でしたが大変お世話になりました。ありがとうございました。



マハナコン工科大学での研修を終えて

人獣共通感染症学研究室 5V 13108 番 松永萌

私たちは今回のタイでの海外研修期間中に、大動物病院、小動物病院、エキゾチックアニマル病院をそれぞれ二日間ずつ見学させていただきました。

日本と異なって、タイでは牛よりも馬のほうが多く飼育されており、大動物病院の業務も馬に対する診察が主でした。大動物病院での初日は、二手に分かれてそれぞれ牧場での往診を見学させていただきました。私が行った牧場では、ポニーほどのサイズの馬が数頭飼育されており、今回はその中の三頭の妊娠検査を行ってほしいとのことでした。



ポータブルタイプの超音波検査機を用いて、直腸検査によって胎児の骨格等を探し、妊娠診断を行っていました。写真に写っているピンク色のシャツを着た人はマハナコン工科大学の5年生で私と同学年ですが、手袋を装着してエコー検査に挑戦したり投薬を行ったりと、とても積極的に診察に関わっていて驚きでした。私も見るだけでなく、駆虫薬の調剤や経口投与をやらせていただきました。人獣共通感染症学研究室所属であるため、馬に触る機会が少なく不慣れな私に対してとても丁寧に教えてくださいましたが、あまりにも投薬が下手だったために、最終的には見かねたオーナーさんが投薬をしなければいけなくなり少し申し訳なかったですが、そのことも含めてとても貴重な経験ができたと思います。

大動物病院での二日目は往診の依頼もなく、時間があつたため、大動物の授業に参加させてもらいました。この日は大学で飼っている馬の尿検査を行うとのことで、ペットボトルの上部を切ったものに棒をつけて採尿を行いました。この検査は、特別な理由があるから行っているわけではなく、ルーティンワークだそうです。写真に写っ

ている馬はなかなか排尿してくれず、他の馬房に移動させたり、水を与えたり、口笛を吹いたりして促してみたものの、最後まで排尿してくれませんでした。



小動物病院ではたくさんの症例を見学させていただきました。マハナコン工科大学附属の小動物病院は5つの診察室を有しており、それぞれの部屋に担当の先生1人と生徒2人が付く形でした。タイでは犬よりも猫のほうが多く、見学中に見た症例のうち7割は猫だったように思います。



ここでも学生が積極的に治療に参加しており、今年から始まった参加型臨床実習もいずれはこのような形で学生がどんどん参加できるようになればいいなと思いました。

小動物病院で見たたくさんの症例のうち半数は犬に噛まれたことが原因による創傷の治療でした。タイは大学構内ですら数匹見かけるほどに野良犬を見る機会がとても多く、それに伴って咬傷事故も増えるようです。咬傷治療でとても面白いと感じた

のは、治療にシート状のマヌカハニーを用いていたことです。



マヌカハニーには抗菌作用があり、浸出液を吸収するのに適しており、ドレッシング材として用いているそうです。臨床現場で実習した経験がないため、日本でも一般的に用いられている手法なのかどうかはわかりませんが、とても驚きました。

エキゾチックアニマル病院では、主にウサギと鳥の診察が多かったですが、近年タイでも日本と同様にハリネズミやサルといったより珍しい動物の飼育が増えている



そうです。しかしながら、飼い主の知識不足によって病気になってしまい、来院する事例も増えているそうです。左側写真のスローロリスは飼い主が日光浴させず、偏った食事を与えていたために代謝障害となった症例で、右側写真のハリネズミは、飼い主と同じベッドで寝ていたためにけがをした症例です。タイと日本という異なった環境ですが、飼い主の知識不足によって動物の病気が引き起こされるというのは同じな

のだなと思いました。獣医師はただ動物の病気を治すだけでなく、正しい生態や飼育方法を伝えることも大切な仕事の一つだなと感じました。

このほか、カオキアウ動物園やアユタヤ遺跡、エレファントキャンプなどの見学もさせていただきました。

中でもカオキアウ動物園では動物園併設の動物病院や繁殖センターで精子の運動像や山ヤギの麻酔なども見学させていただきました。



山ヤギは骨折のギプスまき直しのための麻酔投与だったのですが、1人1人きちんと役割分担されており、誰一人として無駄な動き無く作業が進んでいく様子はとても参考になりました。過去の麻酔実習では1人1人役割を決めていて打ち合わせもしていたにもかかわらず、無駄な動作が多く結果として患者に負担をかけてしまっていたので、今回見てきた実際の現場での動き方を今後活かしていきたいなと思います。

エレファントキャンプでは、象と触れ合ったり、象に乗ったまま歩道を歩いたり、



日本ではなかなかできないことを体験しました。

この象キャンプでは世界各国からボランティアで象のお世話をしてくれる人を募集しているようで、私たちが訪れた時も海外からボランティアで来ている人を何人も

見かけました。ボランティアプログラムは1週間程度でも受け入れているようで、象の生態などについて詳しくなりたい人にはぜひ行ってみたいと思います。

今回の海外研修では、まず第一に英語でのコミュニケーションがハードルとして立ち塞がっていましたが、タイの人はとても優しく我々の拙い英語にも一心に耳を傾けてくれ、また簡単な言い回しに言い換えてくれたりと、当初思っていたほどコミュニケーションで心を挫かれるといったことはありませんでした。また、皆さん授業にも、人間関係にもとても積極的で、初対面の私たちをぐいぐいといろいろなことに参加させてくれて、引っ込み思案な我々はそのおかげでたくさんの症例を見ることができたと思います。タイではたくさんのお話を学ぶことができたと思いますが、何よりも大切なのは自分から行動して何事にも積極的に関わり、臆さず自分の意見を表明することなのではないかと感じた短くも濃い二週間の海外研修でした。

